

〈論文〉

長期的視野に立った子ども主体の保育のあり方についての一考察 ——年少・年中・年長3年間の成長と積み重ねを視点に——

田村 めぐみ・立田 祐理

田村めぐみ 札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科

立田 祐理 学校法人リズム学園恵庭幼稚園

A Study on Child-centered Childcare from a Long-Term Perspective :

From the perspective of growth and accumulation for the first, second, and final three years

Tamura Megumi (Department of Preschool Education & Child Care, Sapporo International Junior College)

Tatuta yuri (Eniwa Kindergarten)

In order to realize child-centered childcare, various efforts are taking place in each kindergarten, and there is a possibility that children will be caught in terms of points because they try to catch the child in front of them. It is also necessary to emphasize the continuity of child growth. Therefore, we will consider the way of child-centered childcare from a long-term perspective, based on childcare practices in Eniwa Kindergarten, which is focusing on child-centered childcare.

キーワード：保育実践

保育者

協働

長期的視野

Keywords: Childcare practice

Childcare worker

collaboration

long-term view

1、はじめに

子どもの主体性や自発性が基盤となり、遊びを通して子どもが成長していくような環境を整えていくことが保育者の役割であると考えます。そうした保育を実現するためには、保育者は子どもたちの姿から何を育てたいか、どのような経験が必要なのかを読み取り、ねらいや願いを環境に盛り込んでいく必要があります。一方で、子どもの姿をとらえようとするあまり、大友ⁱの「常に子どもの傍らにいて、子どもの世界に入り込み、大人に頼りすぎる子どもにさせていた」、「保育者の予測に合わせよう」としてしまう危険性もある。このような子どもの見取りは、どの保育者も経験があるのではないだろうか。平成30年施行の各指針・要領ⁱⁱに『幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない』としているように、一人ひとりの子どもを理解し、子どもがもっている力を十分に発揮できるような保育を実現するために、保育者が望ましいと思う活動を一方的に子どもたちへ行わせるような保育をすることではないだろうか。保育を行う上で、保育者が一方的に“こうしなさい”“それはダメ”と子ども達が考えることなく活動を進めるような保育は、子どもの主体性とはかけ離れてしまう。井口ⁱⁱⁱは、保育者対象のアンケート調査で、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿を保育に活かすにあたり、若手保育者たちは「達成目標が明確になる」と捉え

ている回答がある」また「保育者が設定した目標に到達できたかどうかを検証するための視点として活用するのではない」としている。このように子ども主体の保育を重視している今でさえも、保育者の捉え方一つで、到達目標のように捉えるような保育をしてしまうと保育者主導の保育になってしまい、求められている保育から遠ざかってしまう。保育者が設定した目標に到達できたかという視点でも、竹内らは^{iv}「遊びの状況は保育者の在り方、立ち位置によって、いかようにも変容する可能性があって、私たち保育者が、子ども主体の遊びを構成していくためにも、子どもと共に遊びを楽しむ姿勢が何よりも大切」と述べているように、保育者は、子どもと共に遊びや生活を共にしていく必要がある。このように“これができればよい”“この年齢までにできなければならない”というような型にはめるような保育を実践してはならないのである。

2、問題と目的

上述してきたように、今求められている子ども主体の保育を実現するために、様々な保育・教育施設で子どもを捉える取り組みが行われている。例えば、園内研修で、子どもの姿に応じた環境の見直しをしたり、子どもの写真を見合いながら、子どもの心情や育ちを読み取ったりすることなどが実践報告^vされている。

こうした幼児理解を丁寧に捉え直す一方で、その時々々の幼児理解になってしまっただけでは意味がない。それぞれの

年齢ごとや目の前のその時々を捉えるあまり子どもを点として捉えてしまうのではないだろうか。その一瞬を捉えるだけでは、子どもの成長は明らかにできない。またそれぞれの保育者が異なる保育観で子どもを見ていては、意味がない。保育は、子どもの成長の連続性を重視する必要がある。育てたい子どもの姿の共有や教育目標に向かって保育を行うことが大切であるが、年少から年長までの積み重ねとして保育を捉えていくこと、3年間のつながりに注目することは、子どもたちのよりよい育ちにつながると考えた。

そこで、本研究では、長期的視野に立った子ども主体の保育のあり方について A 幼稚園の実践を検討することで、“子ども主体の保育”にとって重要なことは何かを明らかにすることを目的とした。

3、研究の方法

積み重ねを大切にしたい長期的な保育の実現に向けて、子どもたちはどのように成長し、学び、遊びを深めているのかを保育実践から考察する。

“子ども主体の保育”に力を入れている北海道札幌市近郊にある A 幼稚園での年少～年長までの3年間の保育実践の報告を保育者の視点から整理し、検討する。

3-1、園の概要

園の概要は表1の通りである。

【表1】 令和2年度 時点

設立	明治21年に寺子屋として開設。昭和33年に幼稚園として設立する。
園児数	232名
教職員	53名
学級数	11

A 幼稚園の特徴は、遊び中心である。園庭には四季によって色や形を変える木や実があり、自然物を使ってままごとをしたり、制作（アート）を楽しんだりする。子ども達が声を掛け合い、集団ゲームをしたり、自分たちの生活を豊かにするために畑で野菜を育て、収穫した作物や園庭の木の实を井戸で洗い、気軽に調理をしたりする。独楽やけん玉・竹馬等、自分で目標を定め練習したり、描きたいと思った時に絵を描ける環境があったりする。寒ければ、自身で身体を動かし温め、火を起こし焚き火をする。生き物を捕まえた際には図鑑を開き知識と結びつけ、春に植えた米の苗の成長と共に子ども達は自分で遊びを選択し、のびのびと遊びを深めている。

また、「自ら考える力」を大切にしている。保育教諭は、子ども自身が何に対しても主体的に取り組み、考え、決められるよう働きかける。

年長組になると「スケジュールボード」をもとに自分達で生活を創りあげていく。一日の流れに見通しを持ち、安心感を持つことももちろんだが、片付けの時間や集まる部屋など自分達で声を掛け合って生活している。文字や時計を教えるのではなく、自分達の生活には必要なものであると感じ、興味が持てるよう工夫している。

活動では自己選択ができる場面を意識的に取り入れている。自分で決めることは自分で責任を負うことでもある。子ども達は活動の中で「選択」を重ね、決断の中に自身の考えが伴っていくようになる。必ずしも上手くいくようにという働きかけではなく、何のために・どのような学びの機会なのかという目線で活動を組み立てていくことを大切に、時には失敗し振り返りをする場面をもっている。

自然の中で育つことも、子ども達の育ちには欠かせない。バスを15分走らせた場所にある森では五感をフルに活用して思い切り遊ぶ。

川で水生昆虫を見つければ図鑑と照らし合わせ、頭を寄せ合い観察する。感じたことや発見したことを言葉で語り合い共有する。秋になれば落ち葉に埋もれ、どんぐりを拾い染め物をし、紅葉を楽しむ。年中鳥の鳴き声に耳をすませ、空を見上げる。木を切り倒し、自らの手で薪にする。作った薪で調理やキャンプファイヤーを楽しむ。時には生き物との共生を考え、食物連鎖を知る。森の活動は、「なんで？」の宝庫である。子ども達は「なんで？」に突き動かされるように探求する。

園庭の秋。栗が実ると木登りが得意な子が大活躍し、木を揺する。畑で大きなさつまいもが採れると量りにのせ、自分の体重と比べたり、大きさ順に並べたりする。

冬には、雪だるまを作ったり雪合戦をしたりしながら、雪質の違いや氷はなぜできるのかに興味関心が向いたり、雪の結晶の美しさに心が動いたりする。森の散策では、動物の足跡を見つけたり、尻滑りを思い切り楽しんだりする。

3-2、A 幼稚園の保育の捉え方

A 幼稚園での保育の組み立て方の基本として、PDCA サイクルを軸に（行事・課業¹⁾ カリキュラム）、CAPD サイクル（コアカリキュラム²⁾）で毎日保育を創っている。

2つのサイクルの基で保育を実践する中で、“P(計画)”の部分は保育教諭が行っていることになると思った。より子ども主体として捉えるためにどのようにしたらよいのかを考え、見えてきたのが『OODA サイクル³⁾』である。

OODA^{vi} サイクルは、アメリカ空軍の John Boyd によって提唱され、もともと機動性を重視する軍事行動における意思決定を対象として活用されてきた。最近では、教育現場でも取り入れられている。OODA サイクルは（Observe：観察）から始まる。子ども達の遊びの

姿や、つぶやきから何に興味があり、どのような学びがあるのか見とることから始まる。そこから「Orient：仮説構築」をし、「もっとこうしたら面白いかも」「もっとこうしたら上手くいくかも」という仮説を立てる。子ども達と共に「Decide：意思決定」をし、ひたすらに「Act：実行」する。このサイクルの中で重要なのは、「Act」の中には必ず試行錯誤（Try and Error）が含まれているということ。子ども達は今までの経験や知識をフルに活用しながら、時には大人に力を借りたり真似たりしながら、その山を乗り越え課題を解決していく。

しかし、OODA サイクル日々の保育を積み重ねてきたが、毎日目の前の子どもの姿を捉え、保育を組み立てているがあまり、3年間の連続性が得られにくいのではないかということに気づいた。また自由度が高く、その年の子どもや保育教諭の組み合わせでよくも悪くも担当保育者の持ち味が出る。大切にしてきたことが途切れ、点となってしまっていたのだ。そこで3年間の積み重ねという観点で教育課程を編成することにした。



【図1：OODA サイクル】

4、保育実践の概要

4-1、3年間を通しての保育の指標

3年間の保育の積み重ねという観点で、まずは3～5歳のそれぞれの育ちのイメージを図に表し整理することから始めた。

【3歳児の捉え】

『めばえ』と名付け、遊びに向かう前に、様々な安心を築くことから始める。それは保育教諭に対する安心かもしれない。環境に関しての安心かもしれない。一日の流れが定着し見通しをもてるようになったことへの安心かもしれない。子ども一人ひとりがそれぞれの形で安心を見つけ、心の土台にし、遊びに向かう。そこでシンプルな感情の中に自分を見つけていく。心を解放し、思いのままに遊ぶ。自分が満たされた子ども達は、だんだんと友達に目が向くようになる。(図2参照)



【図2：3歳児のイメージ『めばえ』】

【4歳児の捉え】

遊びの中で感じる「不思議」「うまくいかない」を出会い（人・モノ・コト・智慧）を通して試行錯誤の中で解決していく。出会いは保育教諭が課業という形で好き嫌い・得意不得意に関わらず全員に行う。いかにその出会いに価値があるのか、面白いものなのかを伝えるのが保育教諭の役目であり、腕の見せ所となる。このサイクルは遊びの中で何度も繰り返すことにより、出会いが自分のものとして定着する。その中で自分のアイディアと結びつけることで、個性が磨かれていくことになる。4歳児になると他児とのトラブルも非常に多くなり、個性として自分の思いや考えを主張できるようになる。思い切りぶつかり、話し合いの仕方や相手の気持ちを考える経験を増やすことで、互いに尊重し、自分達で解決できるようになっていくと考える。(図3参照)



【図3：4歳児のイメージ『夢限大～unlimited～』】

【5歳児の捉え】

友達と協働することが楽しい時期である。子どもたち主体の遊びや活動の中で意見を出し合い、個性を爆発させ、化学反応を起こす。それぞれのタイミングや分野で個性を出し、認め合い、友達と智慧や力を併せれば何だってできるということを学んでいくと考える。そして、保育教諭はそれが叶うように環境を整えることが必要となる。年中の時に経験した物・コト・智慧が自分たちの意志で取り出し整頓が出来るような

空間を用意したり、子どもたちがある程度のレベルまで達し遊びが停滞していると思えば、本物との出会いを設けたりする。本物（地域の人やその道のプロで活躍している人）との出会いが再び子どもたちの刺激となり、遊びが発展する。



【図4：5歳児のイメージ『ONE TEAM～Not in a day～』】

以上のように、3歳児では、子どもたちが個人として過ごしていく中で、安心感を見つけていくこと、4歳児では、その安心を土台に、遊びを通して様々なものと出会っていくこと、そうした経験を基に、5歳児では、友達と協働する中で、創意工夫しながら遊びを自らの力で発展させていく姿へとつながっていくのではないかと考える。

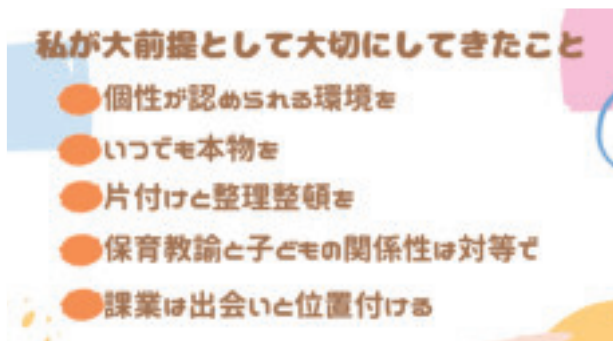
こうした子ども像を保育者全員で共有することがそれぞれの年度で見えていく中での保育の指標となっていくと考える。

年中～年長の際に個性・子ども主体が自分勝手の道に逸れていかないように留意しなければならない。準備・片付け・掃除等も子ども達と行い、自分達が集団として楽しく豊かに生活するために、やらなければならないことも必要であるということを経験できるように配慮する。そこでは雑巾の使い方やほうきの使い方、掃除の仕方は丁寧に教えることが大切となる。その中で自分自身を律し、時には集団を律していくことが必要となっていく。子ども主体を履き違え、自分勝手になってしまっはいけない。それは互いの自由を侵害し、何かトラブルがあった時には話し合いで解決しようとはせず、原因は他者にあると考えるようになる。年長で集団として力を発揮していくためには、他者に目が向き個性や主張がぶつかり合う年中時に丁寧に仲間作り、認め合う姿勢、話し合いの仕方、相手の気持ちを考える機会を設けることが大切となってくる。また、節目で世話になった人達に感謝をすることも必要である。

自治的活動⁴⁾や感謝を伝える機会を通して、他者に目が向くようになる。自分達は周りに助けられ、支えられ、応援されていることに気付く。片付けや整理整頓ができていなかった時は自分ごととして、周りに呼びかける者が出てくるはずだ。掃除の必要性を自分ごととして捉えられなければ意味がないのだ。

4-2、保育の中で大切にしたこと

それぞれの学年のイメージを掲げながら、保育者（立田）が毎日の保育の中で大切にしてきたことがある。（図5参照）



【図5：立田が保育で大切にできたこと】

先に述べたように、年中児では『個性』を大切に保育してきた。全員が同じものではなく、課業や作品作りでは子ども達の思いや表現が光るものという観点に配慮した。

例えば「ホチキスの使い方で冊子にすることができることを学ぶ」のであればオリジナル絵本を作ろう、母の日のプレゼントでノートを作ろう、好きなもの図鑑を作ろう…様々なことが提案できる。試行錯誤して苦労したことや、自分が閃いたわくわくするようなアイデアは思わず誰かに伝えたいものだ。そういった思いを友達に伝えたり、他児の意見に触れたりする機会を大切に設けることが個性を尊重することに繋がると考えた。発表は必ずしも全員でなくて良い。しかし、一人ひとりのつぶやきや思いを拾い上げることは全員行うことを実行した。そういった誰かに認めてもらった経験、個性を大切にされた経験が自信として繋がり、いつの間にか全員が発表の機会を自分の意志で持とうとすると考えた。

保育教諭は、子ども達が遊びや活動の中で困難にぶつかった時には対等な立ち位置で相談できるような立ち位置でありたいと考えた。小学校以降では「伴走者」として表現される^{vii}ようだが、その時の困りや気持ちにそっと寄り添える保育者でありたい。上からではなく共に生活する者の一員として、課業は遊びや生活を豊かにするために、問題を投げかける時には一緒に考えたいというように、決してトップダウンの形にならないように留意した。

また、特に「課業は出会いと位置付ける」には力を入れ、取り組んできた。保育教諭が一方的に知識を詰め込むのではなく、子どもが「今」知りたい、より活動を盛り上げていくためのタイミングを見つけて、「出会い」と位置付けて取り組んでいくことを重要視してきた。

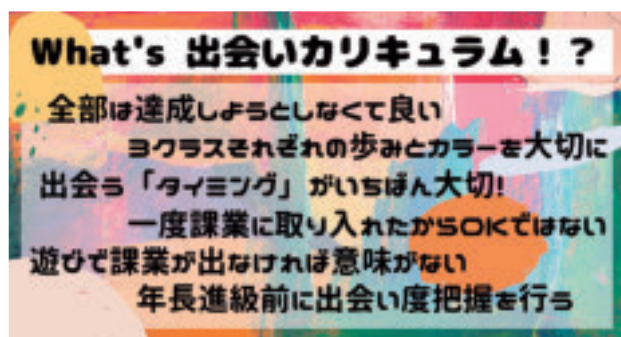
例えば、お化け屋敷を作ることで盛り上がっていたとする。そこに吹き絵という技法を紹介し、血に見立てる。

カラーセロハンとくり抜きの技を紹介し、窓に壁面を作ることによって暗さとおどろおどろしさを演出する。チケツト作りで同じ大きさにしたいと悩んでいるところ、折りたたんで折って開くと形が揃い良いという智慧⁵⁾を伝える等、興味関心が高まっている状態が様々な教材や教具等と出会うということが大切だと考える。

以上のように、保育者が保育の中で子どもの主体性を大切にするために留意する点をしっかりともちながら、保育することは子ども一人ひとりを丁寧につまみかき、育てていくことにつながっていくと考える。

4-3、保育者間で共有するために

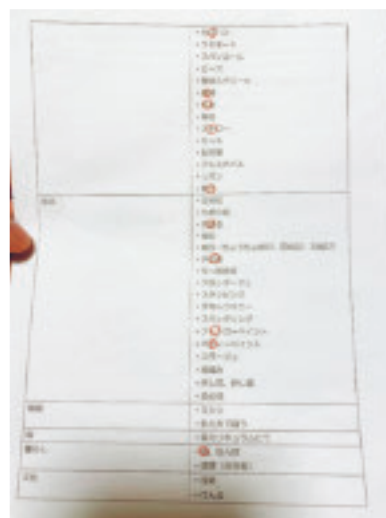
出会いを大切にする中で、年長で育ってほしい力から逆算して「出会いカリキュラム」を作成することにした。



【図6：出会いカリキュラムとは】

出会いとは、子ども達の遊びや主体的なプロジェクト、自分達のアイデアを形にする際に、力を十分に発揮するための人・モノ・コト・智慧のことである。しかし、『全部経験させなくては』という頭が働いてしまっは本末転倒となってしまう。こなすのではなく、いかにそのことや物に価値があるかを伝えられるタイミングか、経験の仕方なのかが大切である。クラス活動をしていると、つい学年で足並みを揃えたくなりがちだが、自分のクラスの子ども達の興味関心を捉え、歩みと育ち、保育教諭の考えも大切にしながら出会いカリキュラムに沿って活動を積み重ねてきた。理解すること・習得に時間がかかるものは何度か繰り返して伝える。年長進級前に出会い度把握を行い、丁寧な引き継ぎを行うことが大切である。

写真1が実際の出会いカリキュラムである「対話」「絵の具」「画材」「道具」「歌」「方法」「地域」「異文化」「暮らし」「森」と多岐に渡り、羅列されている(入園から卒園までの間に経験が出来ていると遊びがより豊かなものとなるものを羅列している)。コロナウイルスや様々な理由から家庭での経験が少なくなっている今、子ども達が受ける刺激も少なくなっている。そういった中で普段であれば当たり前経験できているようなことも、出来ていない。経験が少なければ、子ども達からの意見の幅



【写真1：出会いカリキュラムの実際】

やアウトプットされるものも乏しい。どのような経験や
出会いを積み重ねていくのか。出会いカリキュラムは無
限の可能性を秘めた子ども達の何通りもの軌跡と捉える
ことができる。

また、年度で保育教諭の入れ替えがある際には丁寧な引継ぎが大切となる。子どもの引き継ぎや保護者の引き継ぎだけでなく、子ども達が園で過ごす中でどのような経験をし、何を大切に（想い）保育してきたかを引き継ぐという観点も大切である。出会いカリキュラムをもとに把握しながら、興味関心が高い遊びは何か、子ども達の成長の方向性（長所、伸ばしたいところ）をしっかりと引き継ぐことが重要である。

5、cloud カリキュラムの提案

出会いカリキュラムを通して、保育を実践し、子どもたちの姿を捉えていく中で、出会いカリキュラムとは別のカリキュラムの考えに思い当たった。その名も『cloudカリキュラム』である。子ども達の出会ってきたこと・経験してきたことを貯めているところを「cloud」と表現している。



【図7：cloudカリキュラムのイメージ】

ポイントは、子ども主体のプロジェクトや遊びで試行錯誤する中で、子ども達があの時のあの智慧使えるかと思ったときに、情報（経験）を引き出すという考え方だ。その考え方をみんなで共有できること（過去に経験を共有している仲間がいること）が大切で、cloud の容量は無限大。多ければ多いほど豊かである。

従来のカリキュラムのように全員に同じ経験を提供するのではなく、それぞれの個人の経験（cloud）を活かし、組み合わせ、その時々遊びや生活を進める上で、必要な知識やアイデアを cloud から引き出していく。ただ引き出して終わりではなく、それを友達と共有したり、融合させたりしながら、より遊びや生活が豊かになるようにすることで協同的に「cloud カリキュラム」の完成を目指す。

6、保育実践（事例）を通して

これまで見てきた年少・年中・年長の子どもの捉える視点と保育の中で留意したいこと、出会いカリキュラムを基に引き継いできた実践を踏まえ、子どもたちの姿がどのように変化・成長していったのかを事例から検討した。

6-1、道具・画材・素材・智慧との出会い

事例1 年長児（5歳児）11月

- A 児：「手紙だけだとつまらないね」
 保育者：「ありがたいの他にどんな気持ちを伝えたい？」
 クラスの子どもたちから「驚いてほしい」「喜んでほしい」と様々な意見が出た。
 B 児：「びっくり箱みたいに手紙を詰めるのは、どう?!」
 ・その意見に子ども達の目が輝いた。
 ・「手紙だけじゃなくて、プレゼントも入れたらいいね。」という意見も出る。
 C 児：「でも、綺麗な箱くない？」
 ・「先生お願い！買ってきて〜」の声が相次ぐ。
 C 児：「でも、それって自分で作ったことにならないよ」
 D 児：「わかった！これくらい（手でジェスチャー）の段ボールにキラキラ折り紙と切り紙で飾り付けをして、最後にリボンをかけるのは？」
 E 児：「あ〜クリスマスプレゼントみたいな感じか。」
 F 児：「○○○○劇団員さんへって言葉もつけたらいいね。」
 ・手頃サイズの箱を探し、必要な素材を手に取り、デザインを相談しながら慎重かつ、前向きに製作を進

める。

- ・「○○○○（劇団員）さんへ」の文字を担当している子はガムテープをかたどり綺麗な丸を何個か作った後、一文字一文字書き進め、出来た文字を満足そうに並べている。

年長組（5歳児）の表現の集い（一般的な園でいう発表会）の劇グループで、より「演じる」ことの楽しさを感じてもらうため、S市を活動拠点としている劇団員へ協力を得て、実際に劇を見せてもらったり、声の出し方やセリフの言い方のコツについて教えてもらったりする機会を設けた。子ども達は、行事が終わり、劇団員へ感謝の気持ちを手紙で伝えることになった。早速絵や文字で感謝を綴ると「僕達が劇をしている写真や劇団員と撮った写真も一緒に貼りたい」という声が挙がった。手紙は、感謝を伝える方法の一つであるが（他にも歌やムービー、マッサージ等、様々な感謝を伝える方法があることは経験している）、写真や様々な色や柄の折り紙を切り貼りするコラージュという技法を駆使し、子ども達は夢中になって想いを形にしていた。

この事例でも3年間の積み重ねが伺える。年少時は様々な素材に遊びで触れてきた中で、ちぎる・丸める・見立てる・触る・握る・こねる・切る・ねじる・やぶる・貼る・繋げる…様々な動作を学んだ。年中時は出会いカリキュラムの中で様々な道具・技法・画材・智慧・方法に触れ、遊びで活かし発展してきた。年長時では自分達のイメージを実現させるために今まで出会った知識をフルに活用し、その時々で合うものを選択し、作品を創り上げてきた。今まで出会ってきたものや道具が常により自由に取り出せる「アトリエ⁶⁾」という空間が大切になってくる。

様々な活動や遊びの中では必ず「個性」が出るように心がけてきた。経験を形にするという作品は必ず絵というわけではなく、粘土や廃材…様々な方法を使って表現する中で、正解や決まった形もなく、それぞれの工夫と想いが光るよう援助されてきたのであろう。そうした経験が、子どもたちの中で、様々なアイデアを出し合いながら、プレゼントを作るということへ繋がっていった。

6-2、表現遊び

“表現”を辞書^{viii}でひくと「内面的・主体的な思想や感情などを、外面的・客観的な形であるものとして表すこと。またその表れた形である表情・身振り・記号・言語など」とされている。

また、岩波国語辞典^{ix}では、「心に思うこと、感じることを色・音・言語・所作などの形によって表し、出すこと。その表した形」とされている。

つまり、幼児教育の中での表現とは自分の内にあるものを様々な形で外に表すことである。

劇遊びの中では、必ず何かの役になりきることになる。他者になりきることによって、子ども達は様々な立場を経験し、現実の世界での教訓を得る。劇遊び（ごっこ遊び）は、子ども達の育ちに重要な遊びであるといえる。

表現遊びを通して、子ども達がどのような変化が見られたのかを検討する。

【年少】

前任の保育者から、この年の年少児は、表現遊び（リトミックと劇遊び等）が好きであることを引き継いだ。表現の集いに向けて、普段の保育から気軽にリトミックを行い、それぞれの表現を大切にされる経験を積んだ。現実と物語の世界を行ったり来たりすることのできる年齢として一番想像力が豊かな年齢とも言えると考えられる。例えば、水族館に行った後のリトミックテーマが魚だとしたら床を這う子、ヒレを手で作る子、じっと動かない子、ぎょろぎょろの目玉を目で表現する子…様々な形があって良いと考える。保育教諭がこうあるべきと中に入っただけではなく、表現の一つとして個性を出す。また、リトミックのテーマは日常にあり、雨風、季節、生き物…何だって良い。日常の中にリズムがあり、音がある。気軽に遊び心をもって、遊びを作っていきたいと考えた。

【年中】

劇遊びを行った際、“もっと面白くするためにはどうしたら良いか？”出合いを活かし、経験を積み重ねる中で表現が磨かれていく。また、本物との出合いが子ども達を変えている様子が見られた。

「おおかみと7ひきのこやぎ」の劇遊びをしていた中で、子ども達がやぎを見たことがないことに気がついた。近くの牧場に協力してもらい、間近で（梯子を歩くやぎを下からも）やぎを観察し、何を食べるか、目はどうなっているのか、歩くときや食べる時はどんな音がするのか？ 一口にやぎを観察するといっても、それぞれの感性と視点で経験を積み重ねた子ども達。次に劇遊びをすると、「にわとりは3本指だけど、やぎは2本指（ひづめ）が繋がっている。」「やぎも家があって、寝るところがある。」「ツノは2つ。」と実際に見たこと・経験したことをどのように自分で表現しようか悩みながら（身体で表現する子、物を作り表現する子）、細かい所まで表現しようとする姿が見られた。

【年長】

自分の好きなものをとことん深め熱中する中で、新たな出合いがある。年中時に幅広いジャンルの面白さを知った子ども達は深めたいことを自分で選択し、活動していく。好きな者同士だからこそ、とことん遊び込める世界が広がる。

年長組ともなると、表現の集いと呼ばれる一般的には

発表会の立ち位置となるものは自分達でアイデアや経験を出し合い、内容を決めていく。この年に出たジャンルは5つあった。

人形劇グループでは3匹のガラガラドンをテーマに自分達で人形を作り、ヤギが橋を渡る効果音も大中小どれが適しているかも自分で考え取り入れていた。トロールは布の端切れを使いおどろおどろしさを表現していたが2人で布に入ると顔が見えないことを友達に指摘され、箱に布を掛け、持ち手をつけて自分達が動かすことにした。

影絵グループでは四季を自分達の知っている歌に合わせて表現。影の表現をしていない時も会場を盛り上げようと、ダンスが得意な子がオリジナルで振り付けを考え、表現していた。

パフォーマンスグループでは、日頃から練習し自信を持っていたけん玉・縄跳び（ダブルダッチ）・ディアボロ、ダンスやマジックをショータイムという形で披露していた。

よさこいグループは運動会で行ったよさこいに心打たれた子ども達が集まった。地元を拠点とするよさこいチームを師匠としながら、レベルの高いよさこいに挑戦した。

劇&音楽グループでは、題材選びで「3匹の子ぶた」に決定。年少児でも親しめるストーリーであることから、脚本を子ども達と相談しながら作成。完成した脚本を「いつでも読めるようにしたい」という子ども達の意見から冊子にし、文字のみ書かれた脚本に自分達で想像した絵を書き加えることで想像力を膨らませる工夫をほどこした。中には毎日首からぶら下げバスの中でも読み込む子が出るなど熱心に活動に参加していた。

衣装や小道具、大道具も子ども達と作成した。いつまでに何をやらねばいけないのか、子ども達が自分で計画し、声を掛け合い自由遊びの時間に集まり、活動をしていた。鍋の火は子ども達がセロハンや色画用紙で作った火で表現した。パチパチと焚き火の音は拍手で再現すると良いというアイデアが出ていた。音楽グループは効果音だけでなく重要なテーマソングを担い、劇を盛り上げた。

以上のように、年少児は、表現することを思う存分楽しみ、また自分なりに表現することを認められてきた。年中児は、本物と出合い、それぞれの表現に活かされ、磨かれてきた。こうした年少・年中での積み重ねがあるからこそ、年長児は、自分のしたい表現ごとに分かれ、その中で様々な人や物との出合い、蓄積した経験を基に、豊かな表現が見られた。それぞれの経験が子どもたちの豊かな表現へと繋がっていると捉えることができる。

6-3、言葉での伝え合い

「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」の中にもある“言葉による伝え合い”。言葉とは人間しか持たな

い文化であり、言霊が宿るとして古来より大切にされてきた。

自分の気持ちや考えを言葉にするというのは、大人でも子どもでも、とても勇気のいることである。「相手が私に無関心である」「相手は私を受け入れてくれない」という気持ちの元では、言葉での表現は難しい。言葉での伝え合いが活発にできるようになるためには、信頼関係の構築と、どんな意見でもどんな自分でも受け入れてもらえると言う安心感やチーム作り・雰囲気作りが必要と言える。また、同時に話の聞き方についても考えていかなくてはならない。話を聞くことというのは、目を見ること・おへそを向けること…自身が聞き手だけでなく、話し手になる経験も重ねていきながら、両方の視点で土台を形成していくことが必要と考える。

言葉での伝え合いというのは「話したい・伝えたい」という気持ちが原動力になる。例えば、夏休みに博物館に行って、化石を見たことと伝えてくれる子が「アンモナイトを知っているか」と友達に尋ねたり、嬉しかったことや自分の知識を共有したり、また「あやとりで新しい技を作ったよ。これは、空中ブランコ。」と、出来るようになったことを披露することも立派な伝え合いだろう。「お母さんの好きな曲が増えました。歌います。」と日常の中のニュースだって、子ども達にとっては大切な伝えたいことである。話し合い＝言葉での伝え合いと難しく考えず、まずは自分の身近なことをテーマに挙げ、伝えたいという気持ちを大切にしていけることが必要であるといえる。

【年少】

少人数の中で自分の思いを言葉にして伝える経験から始める。恥ずかしいという気持ちが育つ前に、人前で話すことは日常でよくあることとして経験を積み重ねていきたい。

【年中】

生活の中で出たテーマを中心に話し合いを経験していきたい。

例えば、畑で収穫したとうもろこしをどう調理するのかという話し合いは一番身近で誰にとっても関心の高い話し合いといえるだろう。この時に留意しなければならないのは「意見が言える人だけで、話し合いを進めないこと」「簡単に多数決だけで、決めてしまわないこと」「緊張をして意見を言えない子もいるかもしれない。(意見を書く紙を作成するのか。配慮次第で意見が引き出せるかもしれない。)僕はどんな結果になっても受け入れます(一任)という子もいるかもしれない。どんな形でも立派な意志表示の一つであると考え。クラス全体での話し合いという形だけでなく、意見が出しやすいように小グループでの話し合いにしたり、ペアでの話し合いに

したりする。その際は、必ずしも自由なペアにするのではなく(自由にすると気が合う者同士で固まる)、保育教諭が意図を持って作ったグループにすることも必要である。(意見が言えない者同士にして意見を言ってみる機会としたり、自分の意志が強い同士にしてぶつかり合いを狙ってみたり、自信はないが友達となら意見が出せるペアにして自信を付けてみたりと様々である。)

また、みんなと同じ＝正義、多い方が勝ち(多数決)ではなく、時には友達の意見を聞き自分の意見が変わったり、友達の意見を取り入れて新たな創造をしたりという経験が必要である。〇〇が良いという表面的な話し合いではなく、なぜそうなのかという相手が納得する理由を語ることができるということが重要である。多くの人が納得できる着地点を見つけたり、組み合わせたり様々な視点に立ち、論点を整理しながら探り合い、論を重ね、想いを共有し、互いの考えを理解していくことが話し合いにとって大切である。時には涙を流し、納得できないと感情露わにすることがあっても良い。子ども主体には欠かせない話し合い。保育者は、話し合いの一員として様々な観点で意見を整理し、要点をまとめ、新たな視点を加え等難しい役割を求められている。

【年長】

年中での経験から自分と異なる意見があるから面白い!とオリジナルを作ることに楽しさを見出せるのが年長である。

A 幼稚園では、3月に年長組の集大成とも言える「卒園を祝う会」という行事がある。愛情を持って育ててくれた保護者へ、「ありがとう」を伝える会である。感謝の伝え方は様々である。自分の保護者が何をしたら喜んでくれるかと、自身の経験や出会いの中から意見を出し合い、創り上げていく会である。この年はコロナウイルスによる影響もあり、分散開催・屋外開催(子ども達が慣れ親しんできた森)で行うことになった。北海道の冬という厳しい条件の元、保育者も必死になりながら子ども達と智慧を出し合った。

その結果、出てきた意見は「森探検」「雪中サッカー」「足湯」「雪オブジェ・なぞなぞ」グループの4つとなった。それぞれのグループでの取り組みは、次の4事例である。

【事例2 森探検グループ】

自分たちが慣れ親しんだ「森を案内したい!」という声から始まった。

A児「森に来たことないお母さんもいるよね」

B児「地図があったらいいんじゃない?」

C児「僕たちのバードコール(鳥の鳴き声に似た音を出す道具)をもってもらって、探検してもらったら?」

A 児「いいね。私たちが鳥になるっていうのはどう？」

B 児「じゃんけんして、買ったならシールを渡そう！」
と子どもたちは、スタンプラリー形式でゴールを目指し、最後は何度も試行錯誤しながら作ったくす玉を割ってもらおうという内容に決めた。役割分担をしながら、どう協力して準備を進めて行ったら良いのか考え、日々を過ごしていた。

【事例3 雪中サッカーグループ】

身体を動かすことが大好きなグループ。最初は、自分達が楽しむことに全力を注いでいた子ども達。会の中でも「サッカーを行おう！」と意見が出た。

D 児「勝ったほうが、メダルをもらえることにする？」

E 児「サッカーはメダルじゃなくて、トロフィーだよ！」

F 児「トロフィーって何？」

インターネットで調べる

D 児「あ～、見たことある！」

本物のトロフィーを持っている先生にお願いし、間近で見せてもらう

G 児「このトロフィーカッコいい！」

とそれぞれが、自分のイメージするトロフィーを考える。

D 児「点数をめくる人、ハンドを見る人（審判）とかも僕たちがやろう！」



【写真1：トロフィーを観察する子ども達】

【事例4 雪オブジェなぞなぞグループ】

紙粘土を使って、話し合いながらオブジェの設計図を作った。かまくらや雪だるま、氷タワーのオブジェの3つになった。

H 児「かまくらの中で、写真撮ってあげるのはどう？」

I 児「見るだけじゃ、すぐ終わっちゃうから、周りになぞなぞの看板を立てよう！」

J 児「正解したら赤いスタンプ、正解しなかったら黄色スタンプを押そう！」

H 児「正解の数で、メダルの色を決めるのは？」

I 児「スタンプも作れるよね！この間の版画みたいに！」

J 児「みんなでグループに分かれて、準備しよう！」

このようにオブジェの周りにはなぞなぞの看板を掲載することになった。正解すると赤色スタンプ、不正解だと黄色スタンプ（版画の経験を活かし、画用紙で凹凸を作り、自分でスタンプを作成した）と正解数に応じて景品を渡すという工夫がみられた。また、かまくらの中で記念撮影をし、保護者を笑顔にさせていた。雪解けが進んだり、急に大量の雪が降ったりと自然に振り回されながらの活動ではあったが、天気予報や気温を毎日チェックしながら、日々どうしたら良いかを考え、実践していた。



【写真2：なぞなぞを作成中】

【事例5 足湯グループ】

“森の冬は寒いから、温まってもらいたい”“全部服を脱ぐことはできないけど、足だけなら”という声で始まった。また、10月のお楽しみ会でお父さん方が露天風呂を作ってくれた経験から生まれた。

K 児「温泉にミカンやレモンを浮かべたら、いい匂いがするよ！」

L 児「家でやったことあるよ。」

M 児「ルールを作って看板を立てたらいいね。」

K 児「走ったら危ないとか？」

N 児「何人まで入ることにする？」

L 児「6人ぐらい？」

N 児「あんまり並ぶといけないよね。」

K 児「何秒入るか決めようよ！」

M 児「入っている間、肩のマッサージもしよう！」

と手順やルール（走らない、靴下は靴の中に入れるなど）を書いた看板を周りに立てていた。当日はマッサージや肩たたきをし、保護者をリラックスさせていた。



【写真3：足湯を楽しむ子ども達】

最後には自分達がお楽しみ会で楽しんだキャンプファイヤーでのマイムマイム（年中の頃に経験）を保護者と行い、会を終えた。

子ども達が保護者へ向けて「これからも、一緒に時を刻みましょう」というコンセプトを基に、形や素材、デザイン等を考え、時間をかけて作成した時計と手紙（ラッピングも）を渡し、感謝を伝えた。一つとして同じ時計はなく、時計の文字の作り方や色の配置、手紙の一言ひとことにも子ども達の個性や考えが感じられた。

子ども達自身のやりたいことを実現・実行していくためには3年間で様々な経験を積み重ねていくことが大切であると実感した。

言葉での伝え合いの中で、年少児から自分の伝えたいことを表現し、それを相手が受け止めてくれるという経験が積み重なっている様子が伺えた。そうした経験は、年中・年長と話す人数が増えても自分の想いを伝えるということに抵抗なく過ごしてきたからだと考える。年中児では、意見が言える人だけで活動を進めるのではなく、互いに意見を出し合いながら、活動を進めていくことを丁寧に行っていた。それが年長児で、活発に意見交換をする姿につながっていた。子ども達が主体的に遊びや生活を進めていくためには、こうした想いの伝え合いが重要となると考える。

7、保育実践から

保育現場では、主にPDCAサイクルを一般的に使用している。PDCAサイクルは元々事業活動における生産・品質の管理業務を円滑に進めるための手法として活用されてきた。このPDCAサイクルを保育で使用する場合、保育のねらいであるPlanから考えていくことになるため、ねらいである計画ありきで保育を展開することとなり、子どもの内面や思い、そして「こうしてほしい」という要求を理解できなくなってしまう傾向にある。そうってしまうと無意識にそのねらいに子どもたちを

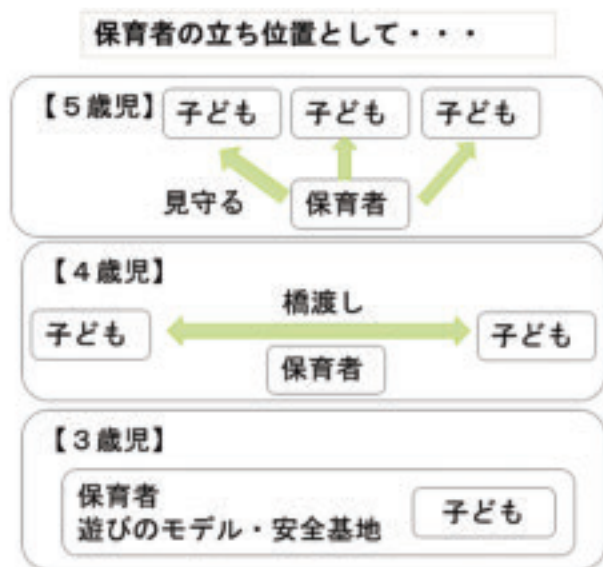
近づけようと保育者主導の保育になりかねない。一方で保育実践の中でこれまで一般的に活用してきたPDCAサイクルとは対照的な「OODAサイクル」という子どもの姿を捉えることから始まる保育の捉え方が見出された。このサイクルの実践を通して、子ども理解から始まり、観察で得られた情報を基に、計画を立てていくため、その子のもっている課題や興味関心を広げるための計画作りがなされ、子どもたちのよりよい育ちへとつながってと考える。

しかし、OODAサイクルを実践する中でも、年度が替わり担当する保育者が変わってしまった場合、子どもを観察する視点や大切にしたいこと、保育の捉え方が異なってくる場合がある。そうなるまで大切にしてきたことが途切れてしまい、積み重ねにならない事態が起こる。そこで大切にしたいのが“丁寧な引継ぎ”である。実践の中でも「子どもの引継ぎや保護者の引継ぎだけではなく、出会いカリキュラムをもとにそれまでの保育を振り返る」としていた。それまで担当してきた保育者から次年度担当する保育者へと丁寧な引継ぎが行われていたと推察できる。担当保育者がこの一年で大切にしてきたこと、子どもの育ちとして大切にしてきたことなど、どのような視点で子どもを見てきたのか検討する中で、引継ぎが行われることが望ましいと考える。またOODAサイクルだけではなく、「出会いカリキュラム」を活用しながら引継ぎが行われていた。現在、子ども達は、共働き世帯の増加や長時間労働など、様々な要因が影響し、園で過ごす時間が多くなっている。「家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ、教員等に支えられながら、幼児期なりの豊かさに出会う場³」として保育の場は存在している。それまでの遊びの中で、何に出会っているのか、子どもたちの育つ力や表現できることも異なってくる。子どもたちは、遊びを通して様々なものと出会う中で、考える力や工夫する力など豊かな力が培われていく。「6-1、道具・画材・素材・智慧との出会い」の中で実践報告があったが、年少児での経験を基に、年中児で自分たちのイメージを具現化するために必要なモノを選択し・作品作りを楽しむ姿があった。また表現遊びの中でもそれぞれの学年での経験の積み重ねが、年長児で花開く姿が見られた。こうして、様々なモノやコト・人と出会うタイミングやその内容を丁寧に見定めて、環境を整えていくことで、子どもの豊かな育ちへとつながっていくと考える。こうした共通の内容を基に、引継ぎ（カリキュラム内容を把握する）が行われる。また子どもの姿と照らし合わせながら保育を振り返り、進級後にどのような環境が必要か検討することで、子どもの育ちも変わってくると考える。

中坪²¹らは、「幼児理解から出発し、保育計画（デザイン）、実践、省察へとつなげる循環モデルの枠組みで保育を捉えることで、その場の保育者だけではなく、そこに

関わる様々な職員との協働が可能になる」と論じているように、子どもの姿をしっかりと捉えつつ、長期的視野をもって保育を組み立てていく必要がある。保育者は、子どもたち一人ひとりの想いや言動を丁寧に観察するとともに、子ども達の成長を年度毎に層のように積み重ねていくことが大切なのであるといえる。

実践報告の中で、保育者は大切にしていきたいこととして、「④保育教諭と子どもの関係は対等で」としていた。子どもたちが様々なものと出会い、学びを深められるような環境を整える中では、年齢によっては対等ではなく、子どもたちが様々な出会いや経験ができるような保育者の関わりが必要になってくる。例えば3歳児では保育者が遊びのモデルとなったり、4歳児では友達同士の橋渡し役となったり、5歳児では見守ったりサポート役となることもある。



このように遊びの中で、保育者は様々な役割を担うが、年齢によっては対等ではないかもしれない。保育者も子どもたちが様々なモノと出会い、経験をしていく中で変化・成長していく姿を見て、とらえ方が変化し、そうした子どもの姿から保育者も学んでいくのではないかと考える。

8、おわりに

これまで見てきたように、保育者も子どもと共に学び合う存在として、様々なものと出会う中で、どのように試行錯誤しているのか創意工夫しているのか子どもの姿から保育者は必要な経験を積み重ねられるような環境を整えていかなければならない。子どもたちも遊びの中で学んでいるように、保育者も子どもたちの姿から日々学んでいかなければならない。子どもたちのよりよい育ちのために、保育者の子どもたちのみる視点が重要となる。個

として、集団として、そして子どもたちが様々なモノや人との関わり、経験を積み重ねる中で、どのように育っているかを把握すること、「〇歳だからこれができるいなければならない」のではなく、今の子どもたちにとって必要なことは何かを見極めることが大切になってくる。だからこそ、園の中で、保育者が子どもの一番近い存在として、子どもたちの良き理解者であるとともに、“伴走者”として、子どもたちの成長を連続性のあるものとして、長期的視野に立って捉えていくことが重要である。

最後に、今後の保育に向け、今回の実践を通して、様々な園で子どもを捉える取り組みがあるが、本研究中のcloudカリキュラムのように、子ども達の日々の経験や体験の積み重ねが重要となる。年少では、子ども達が様々なものや人との関わりの中で、様々な遊びや経験していく。そうした遊びや経験ができるよう保育者は、環境を丁寧に整えている。年中では、子ども一人ひとりがそれまでの遊びや経験したことをcloudの中に蓄積し、それを少しずつ友達と共有し始める。年長では、個人のクラウドがクラス集団のクラウドとなり、一人ひとりが経験してきたことが大きなcloudとなる。それぞれの年齢で経験したことがcloudに溜められ、その溜められてきたものを必要な時に引き出すだけでなく、友達と様々な語り合いを通して、より豊かな遊びへとつながっていくのではないだろうか。子どもを捉えていく視点が様々な園で活かされていくことで、子どもの豊かな育ちや子ども主体の保育に近づいていくと考える。



このように日々の積み重ねが一層ずつ積み重なり、子どものその後の育ちにどのような影響を与えるのか、今ここにある姿を捉えるだけではなく、長期的視野をもって子どもや保育を見つめていくことが求められる。

付記

本研究は、第12回幼児教育実践学会にて口頭発表した。

【注】

- 1) 課業：子ども達が豊かに遊びや生活を展開できるよう、感覚的に行っていることを整理したり、新たな知識や本質を伝えたりするための全員が行う活動や取り組み（出会い）のこと
- 2) CAPDサイクル（コアカリキュラム）：子どもの興味関

心から生まれ、活動から派生し、保育教諭の計画によって実践へ移行していくものである。毎年行われるものでも、期間を決めて取り組むものでもない。

- 3) OODA サイクル：OODA“ループ”が一般的だが、立田は循環するということをイメージし、ループではなくサイクルと捉えている。
- 4) 自治活動：自分たちの生活での課題に問題意識をもち、（より気持ちよく豊かな集団生活を送るために）それについて所属する集団で民主的な手続きによって決めたことに従って行動する活動
- 5) 智慧：様々な「気づき」を指す。知識は知ることによって得ることができるが、“智慧”は体験・経験によって得るものと恵庭幼稚園では捉えている。日常生活を意識的に行動すると様々な気づき（智慧）を生み出す。鼓動によって得た気づきは、その人の体験・経験となる。
- 6) アトリエ：恵庭幼稚園には、今まで出会ってきたが材や素材、道具が常に自由に取り出せる空間がある。アーティストの絵が並べており、連続的に製作に没頭できる美的空間である。

【引用文献】

- ⁱ 大友奈津子・小田進一「子どもの力を信頼する保育の探求—一年長児のお泊り会の新たな取り組み—」『北海道文教大学論集』第21号、2020.3.20 113-142
- ⁱⁱ 汐見稔幸・無藤隆「〈平成30年施行〉保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説とポイント」2018年 ミネルヴァ書房
- ⁱⁱⁱ 井口眞美「「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育の質向上に活かすために」『実践女子大学 生活科学部紀要』第57号、2020、19-36
- ^{iv} 竹内勝哉・柳澤弘樹・堀昌浩・坂本喜一郎・井量昭「子ども

の主体性を育む保育」に関する研究』『保育科学研究』第8巻 2017、93-112

- ^v 厚生労働省「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」2019年6月
- ^{vi} 坂井清隆「D-ODA ループを取り入れた教育実践に関する研究」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』第11号 2021、73-84
- ^{vii} 中央教育審議会「全国学校教育関係者の皆さんへ」2020.4.30
- ^{viii} 「辞林21」三省堂 1993.7.1
- ^{ix} 「岩波国語辞典」(株)岩波書店 2019.11.22
- ^x 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(中間報告)」文部科学省 平成16年第2節 幼児教育の意義及び役割：文部科学省 (mext.go.jp) (検索日 2021.12.17)
- ^{xi} 中坪史典・香曾我部琢・後藤範子・上田敏丈「幼児理解から出発する保育実践の意義と課題—幼児理解・保育計画(デザイン)・実践・省察の循環モデルの提案—」『子ども社会研究』2011年、第17号、83-94

【参考文献】

- 坪井敏純・松本直美「子どもの主体的な活動を生み出す環境を作る—子どものつぶやきを手掛かりとして—」『南九州地域科学研究所所報』第33号、2017、53-63項
- 川田学・津田千明「幼児期における協同性とその援助の視点を探る」『香川大学教育実践総合研究』2009、第18号、65-78
- 大元千種「幼児教育・保育における子どもの主体性についての考察」『別府大学短期大学部紀要』2020、第39号、43-55